

地域の文化遺産を未来へ

上ノ村遺跡

記者発表及び現地説明会資料



記者発表 日時 2005年12月2日(金) 午前10時30分～11時30分

場所 現地(土佐市新居上ノ村)

現地説明会 日時 2005年12月4日(日) 午後1時～3時

場所 現地(土佐市新居上ノ村)

2005年12月
高知県文化財団埋蔵文化財センター

I 上ノ村遺跡の位置

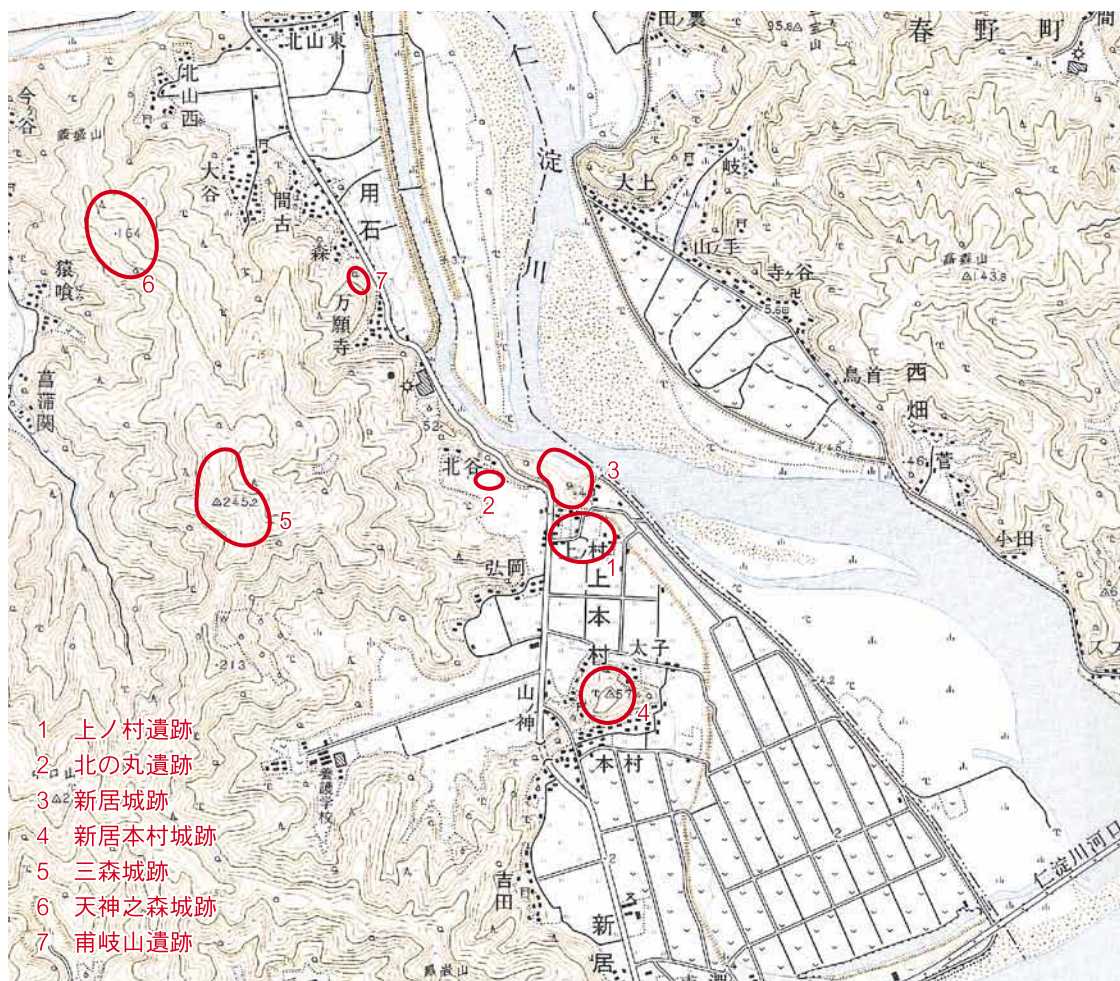


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

II これまでの調査（北の丸遺跡）

平成16年10月～12月にかけて県道新居中島線西側の谷開口部に位置する北の丸遺跡の調査を実施したところ、古墳時代後期（6世紀後半）に多量の木製品が出土しました。これは遺跡が低湿地に立地していることから、木製品が良好な保存状態に保たれていたことによるものです。特に共鳴槽をもった琴や衣笠の鏡板は四国では初めての出土であり注目を集めています。この他にも構造船の舷側板や背子などこれまで県下ではほとんど知られていなかった製品が数多く出土しています。衣笠や琴の出土は、この地が古墳時代に祭祀が行われていた場所であったことを示しています。

III 17年度調査の概要

1 試掘調査

平成17年5月18日～6月24日に周辺部約20万㎡を対象に102個所の試掘調査を実施し、その結果5地点で遺跡を確認することができました。県道を境に西と東とでは遺跡の立地環境に大きな違いのあることから、東側（第1～3地点）については新たに上ノ村遺跡と呼ぶことにしました。

西は低湿地が広がっていますが、東側は比較的乾いており居住空間として利用されていたことが明らかとなりました。

- (1) 第1地点 縄文時代晩期、古代、中世、戦国時代
- (2) 第2地点 中世、戦国時代

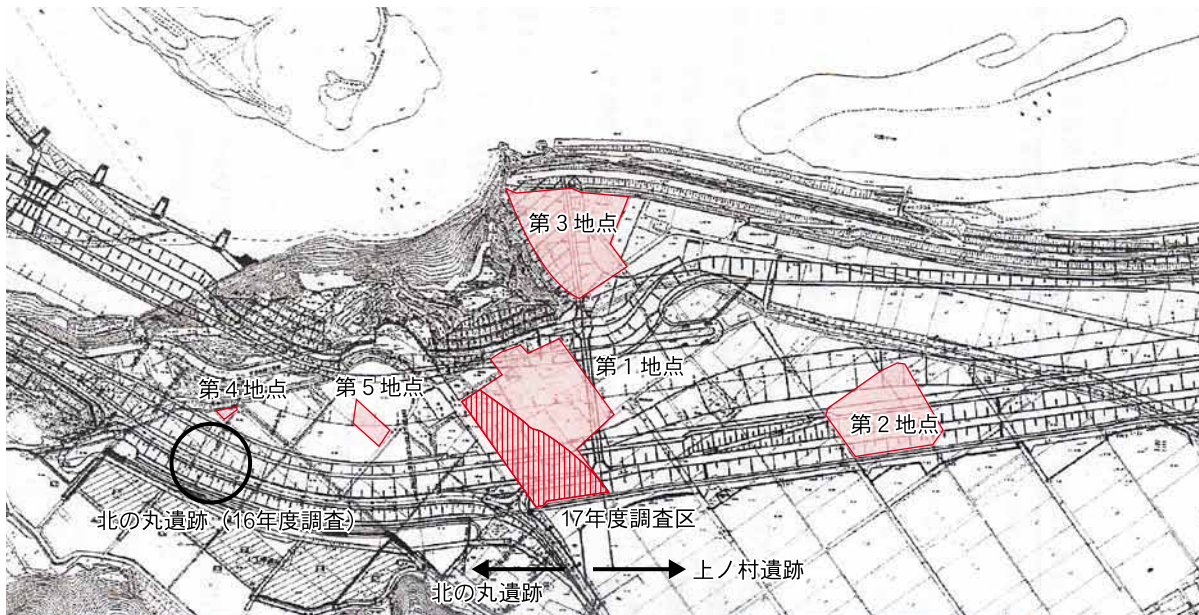


図2 上ノ村遺跡・北の丸遺跡の展開

(3) 第3地点 縄文時代晩期、古墳時代、古代、中世、戦国時代

(4) 第4・5地点 古墳時代後期、古代

2 本調査

(1) 遺跡の所在地：高知県土佐市新居上ノ村土居

(2) 調査の目的：平成16年度より開始された波介川河口導流事業によって失われる遺跡を発掘調査によって記録保存し地域の歴史復元に役立てる。

(3) 調査面積：対象面積約3000㎡

(4) 調査面積：2490㎡(南区830㎡ 北の西区910㎡ 北の東区750㎡)

(5) 調査期間：平成17年8月1日～12月16日(予定)

(6) 調査実施機関：(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

(7) 調査結果

①検出遺構

古代 掘立柱建物3棟以上、土坑12基 溝4条

中世 掘立柱建物10棟以上、井戸1基、溝6条、土坑30基以上 ピット多数

②出土遺物

古代(9～10世紀)

土師器(杯、皿、碗、長胴甕など) 須恵器(杯、皿、碗、壺、甕) 緑釉陶器(碗、皿)

黒色土器(碗)

中世(12～14世紀)

土師器(杯、皿、碗など) 瓦器(碗、小皿) 瓦質土器(鍋、羽釜)

国内産陶器(常滑焼：甕、東播磨系須恵器：捏ね鉢、亀山焼：甕)

貿易陶磁器(青磁：碗・皿、白磁：碗・皿)

IV まとめ 川津として栄えた上ノ村遺跡

今回調査を実施した第1地点は、土居と呼ばれています。調査区の北にある戦国時代の山城、新

居城の裾部に展開している屋敷地として位置つけることができます。しかし調査を行ったところ山城が築かれ機能していたと考えられる16世紀より500年以上も古い古代（9～10世紀）から営まれはじめた遺跡であることが判りました。

古代の遺構は主に北側の調査区から検出されており、大きな四角の掘り方をもった掘立柱建物が3棟程確認できました。実際に使われていた柱の多くは抜き取られたり腐蝕してなくなっていますが、中には根元の部分が残っているものもあります。また建物のなかには、重複しているものもあり同じ場所で建て替えが行われたことを示しています。建物の周りからは、大量の土器が出土した土坑や土器が集中して出土した地点を確認することもできました。これらの土器の多くは、須恵器、土師器と呼ばれている日常的な食器類ですが、中には近畿地方で作られた緑釉陶器や黒色土器も出土しています。緑釉陶器は京都で焼かれた優品で、県下では官衙や寺院、祭祀関連の遺跡以外からはほとんど出土しないものです。

鎌倉時代を迎え、特に13世紀頃になると遺構の範囲が南にも広がり遺跡が拡大されます。建物の数も増え、南北や東西方向に溝が巡らされ屋敷地を囲むようになります。北の調査区の西端からは井戸も検出されました。四角に掘った穴の四隅に柱を建て、その間に板を縦に並べ井側を作っています。柱にはほぞ穴を設けて横棧を差し込み側板を支えています。井側の一辺1.1m、深さは1.1mあります。底の粘度の上には人頭大の角礫や小さな河原石が置かれていました。内部からは、完形の土師器小皿や瓦器椀、青磁や常滑焼きの破片が出土しています。この時期の井戸は、四万十市の具同中山遺跡、野市町の菩提寺土居屋敷遺跡に続く3例目となります。構造や規模はほぼ共通しており当時の井戸のあり方を知ることができます。

屋敷を画する大きな溝は4条検出されており、溝の断面形は蒲鉾状とV字状の二種類があります。田村遺跡や十万遺跡、姫野々土居遺跡などからは溝で囲まれた屋敷群が多く検出されており、中世の集落形態として定着した姿を見せています。しかしこれらは15・16世紀に属するもので、今回のように13世紀代に遡る例はほとんど知られていません。上ノ村遺跡の例は、南四国における生成期中世集落形態として捉えることのできる事例であり、今後、中世集落の変遷史を考える上で重要な資料として位置付けられます。このような溝や建物趾からは先に挙げたような多くの遺物が出土しています。土師器や瓦器の椀や皿、鍋、羽釜などの日常雑器とともに播磨や東海地方の陶器、さらに中国から輸入された青磁や白磁が多く出土しています。これらの遺物を通して当時の流通や地域間交流のあり方を知ることができます。

上ノ村遺跡の古代や中世に何故このような遺跡が出現したのでしょうか。この背景には、仁淀川を利用した水運が深くかかわっているものと思われます。調査区の東には古津という地名が残っています。津すなわち港として古くから機能していた重要な場所であったのです。古代以来ここが川津として機能し、物資が集積され集落が栄えた要衝であったのです。そのような営みを前提にやがて戦国時代には新居城が築かれるようになります。発掘調査が行われるまで、このようなことはまったく知られていませんでした。文字どおり埋もれていた地域の歴史の一ページを明らかにすることができました。波介川導水事業によって新居の歴史的景観は大きく変貌しようとしています、この地域が果たしてきた歴史的役割を明らかにして未来に語り継いで行かなければならないと思います。

最後になりましたが、発掘調査に従事して下さった現場作業員の皆様、調査にご理解、ご協力を頂きました地元の皆様には、紙面を借りまして厚くお礼を申し上げます。

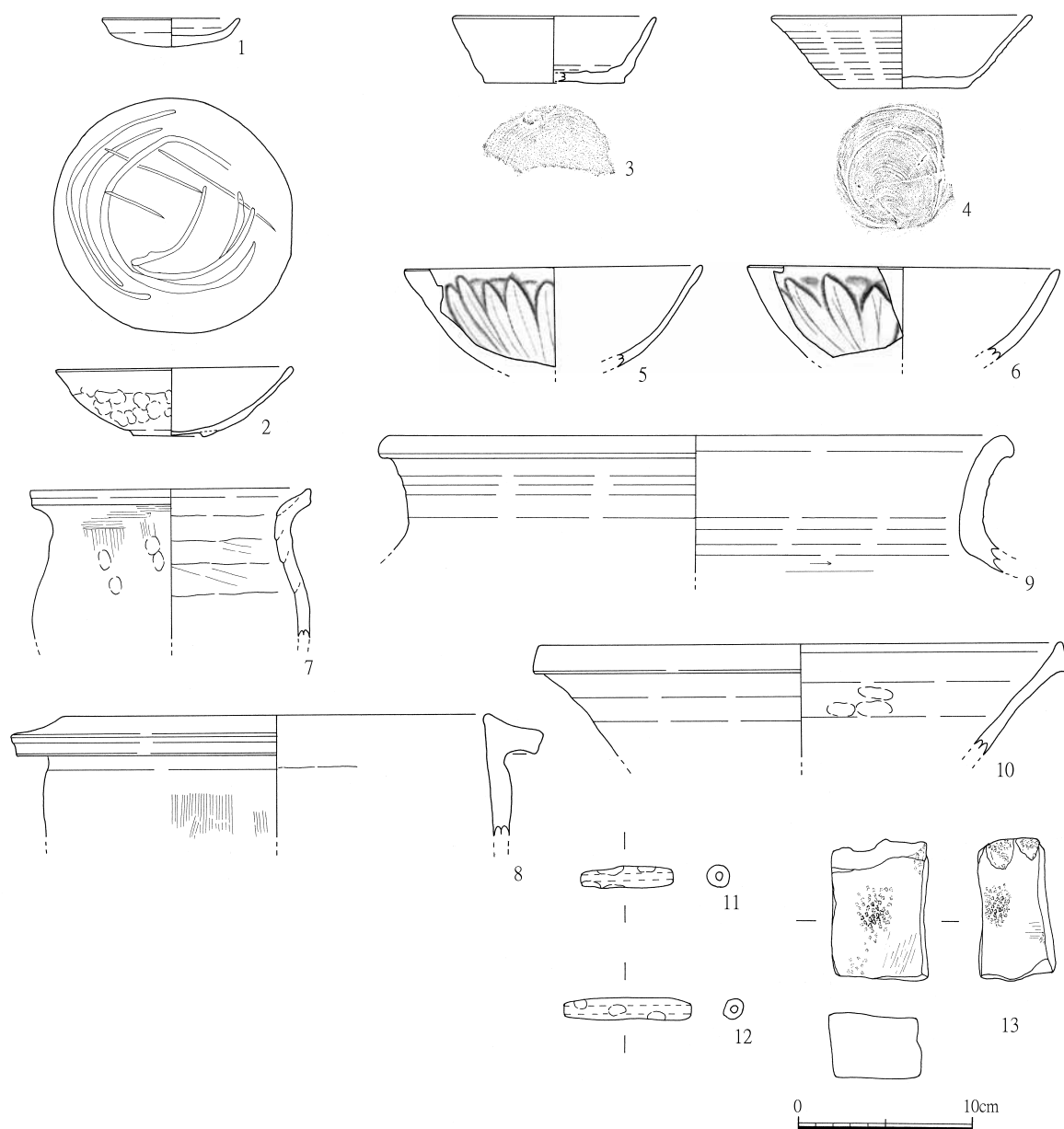


図3 上ノ村遺跡出土遺物実測図

- | | | |
|-------------|------------|------------|
| 1 : 瓦器小皿 | 2 : 瓦器椀 | 3・4 : 土師器杯 |
| 5・6 : 青磁碗 | 7・8 : 土師器甕 | 9 : 陶器甕 |
| 10 : 東播系こね鉢 | 11・12 : 土錘 | 13 : 砥石 |



1 南区全景



2 北の東区中世面



3 古代の土坑



4 土器集中出土状況



5 井戸



6 瓦器碗



7 柱穴内の遺物



8 青磁碗